

地位と役割

—『ポポル・ヴフ』に描かれたキチェー・マヤの社会—

横山玲子 東海大学文学部アメリカ文明学科/教授

[論文]

Status and Role: The Society of the Quché Maya Described in the *Popol Vuh*

Reiko YOKOYAMA

Professor, Department of American Civilization, School of Letters, Tokai University

The *Popol Vuh* is the most important myth of the Quché Maya, one of the groups that dominated the Guatemalan Highlands at the time of the Conquest by Spaniards, and describes the creation of the world by gods and the origins of the Quché and other Mayan peoples. The *Popol Vuh* is divided into two parts by the appearance of the sun. The first half of this tells about the creation of the world and the struggles of the hero twins, Hun Ahpú and Xbalanqué, against the Vucub Caquix and his sons, and also the Lords of Xibalbá. After all, the hero twins became the sun and the moon. In the latter half of it, the gods succeeded to make the perfect four human beings, the ancestors of the Quché, and they praised and worshiped the gods. After the appearance of the sun, the Quché Maya straggled with their god Tohil against other people and then they reigned over the peoples.

In this paper, I'd like to show that this story is not only tells about a process of a creation of the world and a history of the Quché, but also about the order that there should be in their society. When we pay attention to the relationship of characters in the *Popol Vuh*, we could interpret that all characters have the status in each and they play the roles that they should achieve in this story. By considering how the status and the roles of them are depicted, I will try to clarify the social order that the Quché thought about.

Accepted, Jan. 6, 2016

1. はじめに

筆者はこれまで、キチェー・マヤ (Quiché Maya) 族に伝わっていたとされる創世神話『ポポル・ヴフ (Popol Vuh)』を、さまざまな角度から考察してきた。まとめてみると、1) マヤの暦に見られる「4=安定」「5=更新」といった数の象徴性は、この物語における世界創造が4度の失敗と5度目の完成として語られていることから読み取れること¹⁾、2) 『ポポル・ヴフ』に描かれたシバルバー (Xibalbá) という世界は、「シバルバー=地下界=死後の世界=地獄=他界」として解釈されてきたが、死や恐怖を担うものの住む世界であり、死後の世界や地獄としてではなく、キチェー族にとっての「他界のひとつ」であると考えなくてはならないこと²⁾、3) 二世代にわたる双子の親子とシバルバーにまつわるエピソードは、球戯と球戯の道具に着目してみると、マヤの王権に関わる世代交代や地位の継承がどのように行なわれるべきかを象徴

的に説明していると考えられること³⁾、となる。換言すれば、数の象徴性、シバルバー、球戯という3つの異なるキーワードを設定し、神話の構造やモチーフの意味を考えてきたということになる。この作業を通して、個別のキーワードをどのように設定しても、そこには一定の共通した原理があるように思われた。それはいわば「関係性の鎖」といってよいだろう。例えば、世界創造に関わる神々もシバルバーの者たちも、必ず2柱一組で語られることや、被造物であるキチェー・マヤ族の最初の人間たちと4柱の神々との関係など、端的にいえば常に相互補完的な描かれ方をしているということは、明らかである。しかし、いったい何が「相互」に「補完」しあっているのだろうか。そもそも、この物語から読み取ることのできるさまざまな関係性は、単に「補完」的なものとして考えてよいのだろうか。さらにいえば、物語の構造やモチーフそのものに、「関係性の鎖」が極めて重厚に、かつ多元的に張り巡らされているのではないだろうか。

本稿では、『ポポル・ヴフ』で語られる神々、さらにはシバルバーの者たちや人間など、さまざまな存在が、互いにどのような係わり合いをもって語られるのかをみていくこととした

本論文は、『文明』投稿規定に基づき、レフェリーの査読を受けたものである。原稿受理日：2016年1月6日

い。それらが、相互補完性という総括的な概念で説明できるにしても、相互に補完し合う関係そのものが何を意味し、どのような原理に基づいているのだろうか。その根底には、恐らくキチュー・マヤ族特有の考えがあると思われるのである。

2. 『ポポル・ヴフ』

『ポポル・ヴフ』は、16世紀に南部高地のウタトラン(Utatlán)にいたキチュー族が、キチュー語をアルファベットで表記して著したとされる書物である⁴⁾。18世紀初頭、チチカステナンゴ(Chichicastenango)修道院にいたドミニコ会士フランシスコ・ヒメーネス(Francisco Ximénez)は、原文をキチュー語のまま書き写し、これにスペイン語訳をつけて、『グアテマラ州のインディオの起源の歴史(Historias del origen de los indios de esta provincia de Guatemala)』としてまとめた。ヒメーネスが修道院で発見した原本の行方はわからないが、彼の作成した写本は、19世紀に発見され、出版された。この物語は、キチュー族に伝わっていたと思われる創世神話であり、神々による世界の創造とキチュー族の起源を伝えている。物語全体は、創造神たちと二世代にわたる双子の兄弟を中心とした、太陽が昇る前の様子と、最初の人間たちとキチューの部族神が中心となって語られる、太陽が昇るころと昇った後の様子という、大きくみればふたつのまとまりから成っている。次節で、登場人物(神)やモチーフなどについて、さまざまな関係性がどのように描かれているのかを考察するために、いささか長くなるが、全体の概要を、順を追って記述することから始めたい⁵⁾。物語自体は、章や節に分けられていないが、ここでは内容を把握しやすくするために、エピソードごとにまとめておくこととする。

(1) 世界の創造と双子の兄弟

創造神たちは、最初に大地と動植物を創造し、それから神々を敬い養うための人間を創ろうとした。泥や木で人間を創ったが失敗した。このころ、まだ、世界には太陽も月もなく、光がなかった。

あるところに、羽根飾りや財宝を身につけ、自分は太陽であり月であると名乗る、ヴクブ・カキシユ(Vucub Caquix)という男がいた。彼には、シパクナー(Zipacná)カブラカン(Cabracán)というふたりの息子がおり、シパクナーは、自分

で作り上げた山々を相手に球戯をし、カブラカンはその山々を揺り動かしては、自分たちの力を誇っていた。彼らもまた、自分たちは太陽であり、月であると言って憚らなかった。

フン・アフプー(Hun Ahpú)とシュバランケー(Xbalanqué)という双子の兄弟は、神々の命令に従って、まず、ヴクブ・カキシユの歯と目を抜き取って殺害した。また、あるとき、水浴びをしているシパクナーの傍を400人の若者が一本の大木を運びながら通りかかった。彼は、ひとりで大木を担いでやり、若者たちの家まで運んでやった。ところが、400人の若者に殺されそうになったので、逆に彼らを全員殺してしまった。これに腹を立てたフン・アフプーとシュバランケーは、シパクナーを誘いだし、シパクナーは崩れた山の土に埋まって石になってしまった。双子の兄弟は、さらにカブラカンを誘いだし、漆喰を塗りこめた小鳥の肉を白い土で包んだものを作り、これを食べさせて衰弱させた。双子の兄弟は、彼を後ろ手に縛り、首と足も一緒に縛って土の中に埋めてしまった。

(2) フン・フナフプー兄弟とシバルバー

フン・アフプーとシュバランケーが生まれる以前、彼らの父、フン・フナフプー(Hun Hunahpú)は、双子の兄弟であるヴクブ・フナフプー(Vucub Hunahpú)と、双子の息子フン・バツツ(Hun Batz)とフン・チョウエン(Hun Choven)とともに暮らしていた。ある日、彼らが球戯をしている物音に腹を立てたシバルバーの者たちが、フン・フナフプー兄弟をシバルバーへ呼び出した。しかし、実際の目的は、彼らの持っている球戯の道具(皮製の防具やゴム・ボールなど)を手に入れることであつた。母に別れを告げて、天井の窪みにボールを吊るした後、シバルバーへ行ったふたりは、シバルバーの者たちが仕掛けるさまざまな策略を見破ることができず、生贄にされ、埋められてしまった。このとき、フン・フナフプーの首だけが切り落とされ、ヒカロ(jícaras)の木に吊るされると、それまで実のならなかった木にたくさんの実がなり、彼の首がどれなのか分からなくなってしまった。

(3) フン・アフプー兄弟とシバルバー

シバルバーに住むクチュマキック(Cuchumaquic)の娘シュキック(Xquic)は、禁をおかしてこの不思議な木を見に行った。実の間からフン・フナフプーの首が現れ、彼女の差し出した掌に唾を吐きかけ、彼女は妊娠した。怒った父親に生

費にされそうになった彼女は、フン・フナフプー兄弟の母のもとへ逃げて行った。そこでフン・アフプーとシュバランケーが生まれた。成長したふたりは、腹違いの兄たちをサルに変身させてしまった。その後、ふたりは父親たちが使っていた球戯の道具を手に入れて球戯をするようになった。それに腹を立てたシバルバーの者たちが彼ら呼び出したので、双子の兄弟は、シバルバーへ赴いた。シバルバーでは、父親たちと同じようにさまざまな罠（策略）が仕掛けられていたが、この双子はすべてみやぶってしまった。驚いたシバルバーの者たちは、ふたりを球戯に誘ったが、ほとんど引き分けに終わってしまう。

ふたりがようやくシバルバーの策略にかかったのは、コウモリのいる館に入れられた時であった。夜が明けたのを確かめようと、フン・アフプーが身を隠していた筒から首を出した際に、コウモリが首を切り落としてしまったのである。しかし、シュバランケーの知恵で、この切り落とされた首は取り返され、フン・アフプーの身体は元通りになってしまう。シバルバーの者たちは、策略でも球戯でも彼らを負かすことができないので、ついに焚き火を炊いてふたりを呼び出した。ふたりは、自分たちが太陽と月になること、また、そのためには一度死ななくてはならないことを知っていたので、自ら火の中に飛び込んだ。シバルバーの者たちが、彼らの骨を粉砕して川へ流したところ、5日経って復活した彼らは、死と再生をもたらす能力をもって再びシバルバーを訪れた。彼らはシバルバーの主、フン・カメー（Hun Camé）とヴクブ・カメー（Vucub Camé）を殺害し、残った者たちにはもはや何の権力もないことを告げてシバルバーを平定したのち、父親たちの亡骸を探したが、復活させることはできなかった。それからふたりは、天へ昇り、太陽と月になった。

(4) 最初の人間の創造とキチエー族の守護神

創造神たちは、トウモロコシを使って人間を創造した。最初に4人の男が創られ、その後4人の女が創られた。それがキチエー族の祖先であり、カヴェック（Caviquib）族、ニハイブ（Nihaibab）族、アハウ・キチエー（Ahau Quiché）族の3つの部族が生まれた。そのほかにも、タムブ（Tamub）族やイロカブ（Ilocab）族といった、さまざまな部族がいた。しかし、部族の中には、神々を敬わず、糧を用意しない部族もあった。ただ、そのような部族の者たちも、創造神たちのことは

覚えていた。キチエー族もその他の部族も、みな太陽の出現を待ち望んでいた。やがて、彼らはトゥラン（Tulán）という場所に到着し、キチエー族を守るトヒール（Tohil）神、アヴィリシュ（Avilix）神、ハカヴィツ（Hacavitz）神、ニカフタカフ（Nicahtacah）神が現れ、4人の男たちがそれぞれ一柱ずつ、神々を籠に入れて担いだ。タムブ族とイロカブ族の神もトヒールであった。

トヒール神に守護された部族だけが火をもっていた。トヒールは、彼らには無償で火を与えるが、トヒール神を守護神としない別の部族たちには捧げ物（生贄）と引き換えに火を与えた。その後、守護神たちの命によって、4人の男たちは4柱の神々を、指示する場所へ担いで行き、それぞれを安置した。

(5) 太陽の出現と神々への供犠

4人の男たちはハカヴィツ山で香を炊いて踊り、太陽の出現を待った。動物たちも他の部族の者たちも、太陽の出現を皆で喜んだ。太陽の出現とともに、神々は石になった。太陽が昇った後、4人の男は神官や供犠師とともにトヒール神に対する供犠を行なった。彼らの前でのみ、石像となった神々は口をきいた。トヒール神を始めとする神々は、どのように自分たち神々を祀れば良いのかを教えた。

その後たくさんの村が作られ、さまざまな部族がそれぞれ集まって暮らしていた。最初の4人の男を始めとするキチエー族がどこに住んでいるのか、誰も分からなかった。しかし、彼らは道を行く者を捕まえてはトヒール神とアヴィリシュ神の前で生贄に捧げたので、他の部族の者たちは、何とかして彼らと神々を打ち負かそうと企んだ。まず、若い男の姿をしたトヒール神たちが川で水浴びをすることを知り、若い女たちを遣わして神々を籠絡し、神々の印の品を手に入れようとした。神々は4人の男に命じて、3枚のケープに自分たちの印、すなわちジャガー、ワシ、ハチの絵を描かせ、これを女たちに渡した。彼女たちが持ち帰ったケープを纏った首長はハチに襲われ、結局すべての村はトヒール神によって征服されてしまった。ついにすべての部族の戦士たちが、キチエー族の住むハカヴィツ山を襲いに来た。キチエー族を打ち負かし、トヒール神を捕らえることが目的だった。しかし、トヒール神が与えたハチの群れが戦士を襲い、闘いはキチエー族の4人の男の勝利に終わった。すべての部族は、彼らの家来

となった。

(6) 王の叙任, キチューの 24 家

4 人の男は死期を悟り、そのうちの一人、バラム・キチュー (Balam Quitzé) は子供にピソム・カカール (Pizom-Cacal) という生の印を与え、4 人はハカヴィツの山のかなたへ消えてしまった。その包みは開かれることなく、大切にされ、包みの前で香が炊かれた。彼らの息子たちの中から 3 人が、父親たちの言いつけを守って東方の海のかなたへ出かけていった。彼らはナク・シット (Nac Xit) という東方の王から、王国の印綬とその象徴である品々を授かり、ハカヴィツ村へもどり、すべての部族を統治することとなった。やがて彼らはその故郷を捨て、さまざまな場所に居をかまえていき、チ・イスマチー (Chi Izmachi) という町で勢力を広げ、4 代目の王のときに石と石灰の建造物を造り上げた。最初イスマチーのキチューには 3 つの大家しかなかったが、イロカブ族との戦いに勝ち、その権力を広く知らしめた。次に彼らはグマルカアフ (Gumarcaah) の町に移るが、すでに 5 代目の王の時代となっていた。強大化するキチュー族は、王国を 24 の大家に分割した。

物語はその後、歴代の王や首長たちの名、王たちの偉業について書かれている。

3. 『ポポル・ヴフ』から読み取れる、さまざまな関係性について

(1) 神々と人間との関係性について

はじめに、神々による世界の創造の目的について述べておきたい。空と海だけが広がっている世界があり、その水の中から現れた創造神たちは、話し合ううちに、暁とともに人間が現れなければならないという考えに至った。創造の場面ではさまざまな言い方がなされているが、まとめて言えば、創造の目的は、この世界を照らして昼をもたらす太陽と、神々のために食べものを用意し、神々を敬い養う存在を創り出すことにあった。

次に、神々によって創られたものについて整理していく。まず、大地が創られ山々や谷ができ、川が流れ、樹木が生えていった。それから神々を称え、食糧を用意する存在の創造に取り掛かった。シカ、トリ、ピューマ、ジャガー、ヘビを創ったが、目的は達成できなかった。そこで、泥を使って人形

を創ったが、それも彼らの願いを叶えるものではなかった。さらに、木を使って人形を創ったが、繁殖はするものの、やはり神々の願いを叶える存在にはならなかった。動物には、森に棲むだけではなく、殺されて生贄となり、食べられる運命が与えられた。泥で創られた人形は、神々の手ですぐに壊された。木で創られた人形は、神々が起こした洪水によって沈められ、動物や道具に襲われて殺されたが、生き延びた子孫たちは森にいるサルだということである。この 3 度の失敗ののち、神々はトウモロコシを使ってようやく自分たちを敬い養うことのできる、完全な人間を創造することに成功した。

最後に、完成した人間たちと神々との係わり合いについてまとめておきたい。最初に創られた 4 人の男たちは創造神たちに深く感謝し、神々は彼らのために 4 人の女を創造した。彼らはその後トゥランという所で彼らを守護する 4 柱の神々と出会い、最初の人間たちはその後も守護神たちを敬い、神々の望む場所にそれぞれを安置して、神々が石像に姿を変えたのちも、神々を称え生贄を捧げ、養い続けた。彼らの子孫もまた、同じように神々を敬い続けた。キチュー族を守護する 4 柱の神々のうちトヒール神は、キチューの人びとに火を与え、彼らと神々自身の身に危険が迫った時には、知恵を授け、あるいは不思議な力を発揮して、神々自身とキチューの人びとを守り続ける一方で、キチュー族には自分たちの耳や肘などを傷つけて流した血を捧げることを要求した。このことは、トヒール神を祀らない別の部族の描かれ方と対照的である。トヒール神は、キチュー以外の部族には、その胸を裂き、心臓を捧げるように要求したのである。生贄となることを拒む者たちは、キチュー族とトヒール神を襲っては失敗し、結局、ことごとくその支配下におかれることとなった。

以上のことから、次のことを確認することが重要である。第一に、創造神たちは、神々を敬い養う存在としての完全な人間を創造することに成功した。第二に、最初の 4 組の男女は、自分たちの部族を守護してくれる 4 柱の神々を手に入れてこれを養い、なかでもトヒール神からは火を与えられ、絶対的な庇護を受けたことで、あらゆる部族の上に君臨することができた。第三に、トヒール神に対する供物は、キチュー族にとっては自分の身体を傷つけて流す血液であり、他の部族にとっては自らの命である。この第三の点は、最初に創造された動物たちが辿った運命によく似ている。動物たちは神々を敬うことも養うこともできなかったことで、生贄になる

ことや食べられてしまう運命を与えられた。トヒール神を守護神とせず、この神を祀らない部族に対して、トヒール神は心臓、すなわち命そのものを要求するのである。言い換えれば、命を捧げることは、神々が世界創造の目的のひとつとした「神々とのあるべき関係性」が成り立たない存在に対して与えられた、別の「役割」として記述されているということが出来るだろう。

(2) 二世代にわたる双子の兄弟とシバルバーとの関係性について

次に、物語前半の大部分を占める、二世代にわたる双子の兄弟とシバルバーとの関係性について考えてみたい。なぜなら、世界創造のもうひとつの目的である太陽の創造が、このエピソードで語られているからである。

すでに拙著（注2、注3参照）で述べたように、シバルバーはキチュー族にとって「他界のひとつ」であると考えべきであり、また、球戯と球戯の道具に着目してみると、二世代にわたって語られるエピソードは、マヤの王権に関わる世代交代や地位の継承がどのように行なわれるべきかを象徴的に表しているとも考えることができる。ここでは、シバルバーと双子の兄弟とが、構造的にどのような関係をもって語られているのかという視点から考察してみよう。

フン・フナフプーとヴクブ・フナフプー兄弟（親の世代）も、フン・アフプーとシュバランケー兄弟（子の世代）も、球戯の物音に腹を立てたシバルバーの者たちに呼び出されてシバルバーへ赴くこととなった。したがって、双子の親子とシバルバーとを結びつける最大の接点は球戯であり、いずれの場合も「球戯の道具を持ってシバルバーへ来い」という要求がなされている。しかし、父親世代と息子世代ではその対応も結果も異なっていた。父親世代は球戯の道具を家に置いていき、シバルバーの者たちと球戯をすることもなく、用意されていたさまざまな計略を見破れずに笑いものにされ、生贄にされてしまった。一方、息子世代は球戯の道具を持ってシバルバーへ行き、何度も球戯を行っては引き分けに終わり（一度だけ勝利を収めるが）、数々の計略も知恵を使って見破り、ホタル、アリ、カメ、ウサギなど、いろいろな生き物たちの協力を得て、生き延びてしまう。結局、シバルバーで死ななくてはならないことを知っていた双子は、再生するための準備を整えてから、シバルバーの者たちがついにはふたりを

焼き殺そうと炊いた大きな焚き火に自ら飛び込んだ。自分たちの計略通りに5日後に復活したふたりは、新たに物や生き物を再生させる能力を身につけており、シバルバーの主であったフン・カメーとヴクブ・カメーを殺害し、その他の者たちを征服し、天に昇って太陽と月になった。

球戯と球戯の道具は、双子の親子とシバルバーを結びつける接点だが、同時に、シバルバーそのものが、フン・フナフプーたち（親）とフン・アフプーたち（子）とを繋ぐ「場」として機能していることに注目しなくてはならない。つまり、フン・フナフプー（親）がシバルバーへ行って殺害され、その首がシバルバーのプクバル・チャフ（Pucbal-Chah）にあるヒカロの木に吊るされなければ、シバルバーの娘であるシュキックが、フン・フナフプーの子供であるフン・アフプーとシュバランケーを出産することもなかったからである。

シバルバーが、双子に関連する「場」として機能するのは、息子兄弟の死と再生についても同様である。双子が自ら命を絶ち、再び生を受け、特殊な能力をもってシバルバーの者たちを制圧するためには、このシバルバーという「場」での死と再生が遂行されなければならなかったのである。言い換えれば、息子兄弟が太陽と月になるためには、シバルバーという「場」で、一連の出来事を経験しなければならなかった、ということになる。

世界創造の目的のひとつであった太陽の創造には、シバルバーという「場」とそこに住む者たちが必要であったと考えることができるだろう。親の世代と息子の世代を繋ぐ「役割」をもち、双子の息子が使命を全うして太陽と月になるために経験しなくてはならない多くの事柄を用意したのは、シバルバーの者たちに期待された「役割」であったと考えられるのである。

(3) ヴクブ・カキシ親とフン・アフプー兄弟との関係性

ヴクブ・カキシ親とフン・アフプー兄弟との関係性については、拙著「球戯と王権」の中で、詳細に分析を行った。その結果を踏まえて、この物語にどのような関係性を読み取ることができるのかを簡単にまとめておきたい。ヴクブ・カキシ（親）は宝石で身を飾り、自分こそが太陽であると言って憚らなかつた。息子のシパクナーは、自分こそが大地を創った者だと言って憚らず、山々を相手に球戯をして暮らしていた。もう一人の息子であるカブラカンは、自分こそが天を

揺らし、大地を揺らす者だと言っては、山々を揺り動かして暮らしていた。こうした振る舞いに対して立腹したフン・アププーとシュバランケーは、この3人を退治するために出かけていった。まず、ヴクブ・カキシユとの闘いでは、彼の歯と目をすべて奪い奪って死に至らしめた。歯と目は、マヤにおいてはいずれも太陽神を象徴するものである。双子の兄弟は、ヴクブ・カキシユが身につけていた宝石や羽飾りなども、すべて奪い取った。次にシパクナーは、400人の若者たちを殺害したことが原因で、双子の兄弟に誘い出され、崩れ落ちてきた山に埋もれて石になってしまった。シパクナーに殺された400人の若者は、後にフン・アププーとシュバランケーとともに天へ昇り星々に姿を変えたという記述があることから、夜の星々を象徴した存在であると考えることができ、シパクナーが行なった若者たちの殺害は、いわば「星々を消滅させる」行為にほかならない。最後に、カブラカンだが、彼は特段何かをしたわけでも、双子と争ったわけでもないが、双子に誘われて巨大な山を潰しに出かけた際に、双子によって縛り上げられ、地中に埋められてしまったのである。

この出来事は、創造神たちによって太陽が創りだされる前、すなわち、フン・アププー兄弟がシバルバーを制圧し天に昇って太陽と月になる以前の出来事として語られており、彼らは実は太陽ではなかったのも語られていること⁶⁾に注意しなければならない。つまり、創造神たちが望む太陽はまだ出現していないのにも拘わらず、ヴクブ・カキシユは自らを太陽であると主張しているのである。創造神たちの意にならな太陽と月になるのは、フン・アププー兄弟のはずである。彼らがこの親子を退治するのは、いわば「真」の太陽となるべき存在が、「偽」の太陽を滅ぼす行為だと考えることができる。「偽」の太陽は、太陽であることを示す印(歯と目)を奪われ(ヴクブ・カキシユの死)、夜を昼へと交代させる「太陽」の基本的役割を奪われ(400人の若者を殺害したシパクナーの死)、もはや何も行なうことができなくなった「偽」の太陽は、地中に埋められてしまうのである(カブラカンの死)。偽の太陽の破滅という主題が3つの段階に分けて描かれていると読み取ることが可能だろう。

このように考えた時、ヴクブ・カキシユ親子を退治することで、フン・アププー兄弟は自分たちが「真」の太陽(と月)になるべき存在であることを主張しているように思われる。ヴクブ・カキシユ親子は、太陽になる前のフン・アププー兄

弟によって滅ぼされなければならないという「役割」を担って描かれているということもできるだろう。

ここでは、神々と人間、二世代にわたる双子の兄弟とシバルバー、ヴクブ・カキシユ親子とフン・アププー兄弟、という3つの組み合わせについて、それぞれどのような関係性をもって語られているのかということを考えてきた。その結果、それぞれの関係性の要として、登場する者たちに固有の「役割」、それらの相違や相克が扱われていることを見て取ることができた。人間の役割、シバルバーの役割、ヴクブ・カキシユ親子の役割であり、同時に、フン・フナププー兄弟にも、次世代を生み出すという役割があり、フン・アププー兄弟には、太陽と月になるという役割があることは、明らかである。では、なぜこのようにそれぞれの役割が述べられているのだろうか。次節では、この点について考察する。

4. 地位と役割

(1) 社会の成員を規定する地位と役割

アメリカ合衆国の哲学者であり社会心理学者でもあるジョージ・ハーバード・ミード(George Herbert Mead)は、その著書『精神・自我・社会』の中で、人間の自我がどのように形成されるのかという問題に対して、「理性という器械は、経験界についての理性自身の分析のなかに理性そのものを〔対象として〕取り入れなければ、あるいは、その人がある社会状況のもとではたらきかけている他の人間の自我のと同じ経験界に自分自身を導き入れなければ、完全にはならないだろう」⁷⁾と述べている。また、自我と社会的経験との関係について、「われわれは、さまざまな人びととさまざまな関係の糸で結ばれている。〔同じ〕わたしが、ある人にはある人間で、別の人には別の人間になる。…われわれは、自分の知人たちとの関連に応じて、自分自身をあらゆる種類のさまざまな自我に分割している。…あらゆる種類のさまざまな社会的対応^{リアクション}に対応するあらゆる種類のさまざまな自我がある。こういう種類の経験なしには、自我は自我として存在しない」⁸⁾と述べてもいる。すなわち、「かれの自我の構造は、かれの属している社会集団に属している他のすべての人間の自我の構造と同じく、その集団の一般的な行動パターンを表現し反映している」⁹⁾と考えるのである。ミードの指摘する「その集団の一般的な行動パターン」は、社会集団内で規定された個人の「役

割」と言い換えることができよう。

同じアメリカ合衆国の文化人類学者ラルフ・リントン (Ralph Linton) は、個人が文化に対してどのように関与するのかということを論じた際に、「…社会の文化に対する個人の関与は、偶然によって決定される問題ではない。それは主として、又外面的文化に関する限りでは殆ど完全に、その社会における彼の地位と、その地位を将来占めるとする予測のもとに彼が受けた訓練とによって決定される。従って個人の行動は、単に社会の全文化との関係ばかりでなく、その社会における彼の地位に応じて社会が彼に課する、特定の文化的な要求との関係において研究されねばならない」¹⁰⁾ と考える。リントンの言う地位 (status) は、個人がその社会に占める位置であり、役割 (role) とは特定の地位に対してその社会が求める態度や行動である¹¹⁾。リントンは、地位には、帰属的 (生得的) な地位 (the ascribed status) と、達成的 (獲得的) な地位 (the achieved status) があると考えた¹²⁾。特に性差などに代表される帰属的 (生得的) な地位は、多くの社会システムの基礎として機能していることを指摘している。一方、やはりアメリカ合衆国の社会学者であるピーター・ラドヴィック・バーガー (Peter Ludwig Berger) は、後者すなわち達成的 (獲得的) な地位について、「社会の成層体系から見れば、この達成のエートスは社会移動のエートス、つまり成層体系における個人の地位を改善し向上させようとする野心へと転化される」¹³⁾ と述べており、主にアメリカ合衆国型の社会においては、生得的地位よりも獲得的地位に価値を見出していることを指摘している。

ここで注目したいのは、帰属的地位も達成的地位も、いずれもその地位から派生する役割同様に、その個人が所属する社会によって規定されている、ということである。逆に言えば、地位も役割も、社会的に承認されていないならば、そもそも成り立たない、と考えることができるのである。ミードは、「…原始社会と文明社会のあいだにあるひとつの差異は、原始社会に住む個人の自我は、文明社会に属する人に比べて、その思想や行動に拘り、彼が属している特殊な社会集団の遂行している組織化された社会活動の一般化された型によって、ずっと完全に規定されてしまっている点である。…そしてこの〔社会〕型は、社会的行為についての組織化された型のなかで、すなわち所与の社会集団が明示し、かつ遂行している経験や行動という社会過程のもつ統合され関係づけられた

構造のなかで、いちはやくあたえられ、表示され、実例でもって説明されている」¹⁴⁾ という。『ポポル・ヴフ』は、マヤのキチエー族に伝わっていたとされる創世神話であることは、すでに述べた通りである。この物語のなかで、神々や人間、動物などが、互いに役割をもって関わりあって描かれるのは、社会内における種々の存在に対して、キチエー族の社会がどのように地位を認め、どのような役割を期待しているのかを示していると考えられるのではないだろうか。

(2) 『ポポル・ヴフ』に見る神々と人間

まず、神々に対する動物と人間の描かれ方について見てみよう。動物たちは、口を利くこともできず神々を敬うこともできなかったことから、自分たちの食べ物と住む場所を森や谷間に求め続けることになり、彼らの肉は生贄にされて食べられてしまうことになった。言い換えれば、創造神たちが創り上げた世界では、動物は森や谷間で生き、生贄にされたり食べられたりする存在であると位置づけられたのである。それが彼らの地位と役割であった。

多少なりとも口を利くことができるようだが、神々の思う通りに仕上がらなかつた、泥の人形と木の人形は、前者は完全に滅ぼされて、いわばただの泥に戻ってしまい、木の人形も滅ぼされてしまった。泥や木で創られた人間など、この世界に存在してはならないのである。ただ、木の人形の子孫は、森にいるサルになったという記述があるので、先に述べた動物と同じような存在として語られているといえるかもしれない。

トウモロコシで創られた最初の4組の男女、すなわちキチエー族の祖先と、キチエー族とその他の部族については、『ポポル・ヴフ』の中でどのように考えられていたのだろうか。最初の4組の男女は、創造神たちを敬い、後に出会った4柱の神々に対しては、彼らもその子孫たちも、自分たちの血液と、他の部族の人びとの命を捧げて養った。キチエー族は、創造神にとっても4柱の守護神たちにとっても、望み通りに振舞う民族である。一方、キチエー以外の部族たちは、確かに神々のことを知ってはいたが、神々を敬い養おうとはしない、つまり神々の求める振る舞いをしない民族たちとして語られている。それどころか、キチエー族を襲ったり、トヒール神を略取しようとしたり、あるいはキチエー族と彼らが信奉する神々も、一緒に滅ぼそうと企む人々である。結局、彼らはキチエー族によって捕らえられ、自らの命を神々に捧げなけれ

ばならず、キチュー族に征服される対象となるのである。このことを別の言葉でいうならば、神々によって創造された人間は2つのカテゴリーに分けられており、その弁別は、「神々を敬い、その糧を用意する」か、それをしないかということが基準になっている。神々が求めた人間としての役割を果たす部族には、すべての部族の上に君臨するという地位が本来与えられていたものであり、神々に捧げる生贄として、他の部族の人間を捕まえるという、派生的な役割が期待されていたのである。一方、神々の求める人間としての役割を果たそうとしない部族たちには、もともと、征服され、捕らえられて生贄にならざるを得ない存在という地位が与えられていたと考えることができる。別の見方をすれば、動物以外にも、生贄になる地位をもった存在＝人間が必要だと考えられていたと読み取ることができるだろう。神々が生贄を求めているのであれば、生贄を用意する側の存在と、生贄そのものになる側の存在という、ふたつの地位をもち、それぞれの役割を履行する集団双方が必要である、ということが、『ポポル・ヴフ』に述べられていると考えることができる。

(3) 二世代にわたる双子の兄弟とシバルバー

次に、シバルバーがどのように位置づけられているのかを見てみよう。そもそも、この物語においてシバルバーは、人間に怪我や病、死をもたらす者たちの住む場所として描かれている。また、フン・フナフプーとヴクブ・フナフプー兄弟（親）と、フン・アフプーとシュバランケー（子）のどちらに対しても、シバルバーへ呼び出し、策略と球戯で彼らを負かし、彼らの命と球戯の道具を手に入れようとする者たちのいる所である。シバルバーが双子の親子にとってどのような役割をもっていたと考えられるのかは、すでに述べた通りである。繰り返しになるが、シバルバーで父親兄弟が殺されたことによって、フン・アフプーとシュバランケーは生まれることができたのであり、フン・アフプーとシュバランケーが天に昇って太陽と月になれたのも、シバルバーでの死と再生を経験しなくては、不可能だったのである。つまり、シバルバーという場所、シバルバーに住む者たちがいなければ、創造神たちの目的のひとつであった太陽の創造は、実現しなかったとすることができる。この物語においては、二世代にわたる親子に対立するものという地位をもち、この地位から派生する役割として、この世界に太陽を出現させることが、シバルバーとい

う場所とそこに住む者たちに求められたことであつたと読み解くことができる。

では、この役割を果たした後のシバルバーは、どうなるのだろうか。シバルバーを制圧したフン・アフプーとシュバランケーは、命乞いをするシバルバーの者たちを集めて、彼らはもう球戯をする立場にはないことを告げ、鍋や石臼を造っていけばよいこと、人間を捕まえてはならないことなどを言い渡すのである。今後シバルバーの者が相手にできるのは、罪人や悪い者たちだけだ、ということも告げている。つまり、彼らには、人間一般とは関わることができない者という地位が与えられ、二世代にわたる双子の親子とシバルバーとを繋いだ「球戯」には、もう一切関わることもできず、双子の親子のような人間の範疇を超えた優れた能力をもつ者たちを相手にすることはもはやその役割ではない、ということが明示されたのである。シバルバーの者たちの地位と役割は、太陽を出現させるために必要であったものから、それとは異なったものへと変更されたことが、隠喩的に語られているとすることを示唆することができるだろう。

さらに重要なことは、フン・アフプーとシュバランケーがシバルバーの者たちを皆殺しにして、シバルバー自体を消滅させようとはしなかったことであろう。先に述べた、神々の求める振る舞いをする人間と、そうではない人間の双方の存在があつてこの物語の世界が成り立っていることから考えると、太陽の出現をもたらすための役割を終えたシバルバーが、地位と役割を変えられながらも存続することは、その後もシバルバーという場所やそこに住む者たちの存在が必要とされていると解釈することができるのである。実際、キチュー族の最初の4人の男たちの前にシバルバーの使者が現れ、トヒール神こそが彼らの守護神であること、彼ら以外の部族の者たちが火を貰うためには、トヒール神に捧げ物をしなくてはならないこと、何を捧げるのかはトヒール神に訊くべきであることを告げている。シバルバーそのものの地位と役割が語られているわけではないが、シバルバーからの使者が現れることは、やはりシバルバーの存在は、人間が誕生したあとの世界においても必要なものとして語られていると解釈できるだろう。

このように考えた時、『ポポル・ヴフ』において太陽が出現するまでの物語のひとつとして語られるヴクブ・カキシ親子にまつわるエピソードは、奇妙に思われる。この親子は、

フン・アププーとシュバランケーによって完全に滅ぼされているのである。

(4) ヴクブ・カキシユ親子とフン・アププー兄弟

ヴクブ・カキシユ親子は、世界にまだ太陽が出現していなかったころに、自分たちが太陽だと主張する、いわば「偽」の太陽であり、フン・アププー兄弟が彼らを退治するのは、自分たちが「真」の太陽になるべき存在であることを主張しているようにも思われることは、すでに述べた。実際、物語の中でヴクブ・カキシユ親子は、太陽ではなかったのだ、とも語られているが、そもそも、なぜヴクブ・カキシユ親子は「偽」の太陽なのだろうか。フン・アププー兄弟との関係性からは、「真」の太陽によって滅ぼされる「偽」の太陽という地位と役割を読み取ることができたが、ここでは、何をもって「偽」と言えるのかを考えてみたい。

ヴクブ・カキシユ親子の特徴は、第一に、宝石で身を飾り、太陽神を象徴する目と歯を持つこと（ヴクブ・カキシユ）、第二に、山々を相手に球戯を行い、大木を一人で担ぐことができ、400人の若者を皆殺しにしてしまったこと（シパクナー）、第三に自分こそが天と大地を揺らすものだといいは山々を揺り動かしていたこと（カブラカン）、である。この親子にまつわるエピソードは、創造神たちが木の人形を創造したエピソードに続いて語られており、ヴクブ・カキシユが、まさに自分こそが太陽だと主張していたときに、大洪水によって木の人形たちが滅ぼされた。この親子がいつ、どこから現れたのかは何も書かれていないが、ヴクブ・カキシユ自身が、創造されたものの中で自分こそが最も偉大なのだ、と叫んでいること¹⁵⁾を考慮すれば、ヴクブ・カキシユ親子も創造神たちによって創造されたと考えることができるだろう。創造神たちのもうひとつの目的である「太陽の創造」が、すでに起こったかのようなようである。しかし、ヴクブ・カキシユは太陽ではなく、身を飾る羽と宝石が輝いていたにすぎない。ヴクブ・カキシユのこうした態度をみて、創造神たちはこの親子を滅ぼそうと考えた¹⁶⁾のであり、フン・アププーとシュバランケーも、彼の振る舞いが良くないことだから退治しようと決心するのである。

つまり、羽や宝石で身を飾り、太陽神の象徴である目と歯をもち、自分こそが太陽だと言って憚らないヴクブ・カキシユの「振る舞い」は、創造神の望むものではなかった、という

ことになる。また、シパクナーについてはどうだろうか。400人の若者（星々）は、シパクナーがたったひとりで大木を担いだその行為に対して、良くないことだと考えて彼を殺そうと企んだのであり、また、シパクナーがこの若者全員を殺害したことが、フン・アププーとシュバランケーに滅ぼされる原因となった。シパクナーのふたつの「振る舞い」もまた、あるべき振る舞いではなかったことになる。最後に退治されたカブラカンについては、山々を揺り動かすということそのものについて、創造神たち自身が良くないと思っており、フン・アププーとシュバランケーに彼の殺害を命じた¹⁷⁾。

まとめて言えば、この親子の行なう行為も主張も、ひいては存在そのものも、ことごとく「あってはならないこと」として語られているのである。創造神によって創造されたものうち、ヴクブ・カキシユ親子は、勝手に自分たちは太陽としての地位をもっていると主張して、「太陽」が本来もっている「役割」を演じてしまったのである。その振る舞いを神々が許さなかったということは、そもそもこの親子には、神々によって「太陽」という地位が与えられていなかったことになる。言い換えれば、求められる「役割」を果たすためには、それにふさわしい「地位」が必要だということを示したエピソードだと考えることができよう。地位もないのに、その地位に期待される役割を演じてしまうような存在は、「あってはならない存在」であり、神々の命、あるいは社会の規律によって滅ぼされなければならなかったのである。しかし、フン・アププー兄弟が太陽としての地位と役割をもっていることを確認するためには、ヴクブ・カキシユ親子の存在は、反語的であるが、必要であったと考えなければならない。

5. おわりに

これまで筆者は、数の象徴性、シバルバー、球戯という3つのキーワードを手がかりに、『ポポル・ヴフ』の構造やモチーフのもつ意味について考察を行ってきたが、いずれの論文においても、この神話で語られているさまざまなエピソードには、それぞれ、キチュー・マヤ族が考えていた世界観が、登場人物（あるいは神）や出来事そのものによって、象徴的に表されていることを示してきた。このような研究過程を通して、彼らの世界観の根底には、登場する全ての人物（あるいは神）や事物、現象を繋ぐ、「関係性の鎖」とも呼べるようなものがあるのではないかと考え、本稿ではそれぞれの係わ

り合いに着目し、「関係性の鎖」がどのように構成されているのかについて考察してきた。その結果、少なくとも、神々と動物や人間との係わり、二世代にわたる双子の兄弟とシバルバーとの係わり、偽の太陽であるヴクブ・カキシ親子と二世代の双子兄弟との係わりにおいては、互いの存在を必要とし合う関係性を見て取ることができた。言い換えれば、どちらかの存在なくしては、どちらも存在できない、という関係である。しかし、互いに存在し合うための、単なる相互補完的な関係というだけではなく、そこには、登場する者たちがそれぞれに担うべき地位と役割が、明瞭に語られていると考えなければならない。ミードやリントンたちが指摘した地位と役割は、社会を秩序付け、その秩序を保つために人類が考え出した装置である。『ポポル・ヴフ』に登場する者たちが、地位と役割を主題として語られているのも、キチュー・マヤ族自身が、現実の社会をどのように秩序づけていたのかを重視していたからだと考えることができよう。ミードの言うように、われわれは、さまざまな人びとと、それぞれ関係の糸で結ばれているが、それは個人が恣意的に結ぶ関係ということではない。社会において、個々人を結ぶ関係性のあり方が認められている状態においてこそ、その社会の秩序は維持できる。神々の役割は、いわば社会の秩序を創り出し、その秩序を維持することにあるということが出来る。社会において認められた関係性を無視して自分の地位を主張し、身勝手に行動することは、社会そのものを無秩序な状態に陥らせることになる、ということであろう。『ポポル・ヴフ』は、世界の創造という、いわば社会の秩序化を語りながら、同時に、無秩序な状態がどのようなものなのかも、示しているということが出来るのである。

フランスの社会人類学者、クロード・レヴィ=ストロース (Claude Lévi-Strauss) は、未開社会について、「…いわゆる「未開社会」は、そのままであり続けるものとして、その社会のメンバーによって考えられており、だからこそ私たちの目には、「未開社会」と映るのです…このような社会では複雑な文明社会に比べて、内部の社会構造の目がつまっておき、人びとの生活の背景となる舞台装置もより豊かであると言えましょう。それぞれの社会で用意された生きかたこそ、生きるに値するただひとつの生きかたと考えられ、技術的、経済的水準のきわめて低い社会であっても、生活の満足感と充実感を

与えることができるのです」¹⁸⁾と述べている。そのように考えると、『ポポル・ヴフ』は、世界の創世を語りながら、キチュー族の生きかたを物語っていると言うことができる。

また、「社会とは機械であると同時に、その機械の行なう仕事でもあります。社会は蒸気機関のようにエントロピーを生みだす一方、原動機として秩序をも生みだします。このような二つの面—秩序と無秩序は、文明を考えるうえの二つの視点—「文化」と「社会」に比較することができます。文化とは、ある文明に属する人びとが世界ととり結ぶさまざまな関係の全体のことであり、社会とは、それらの人びとがお互いのあいだにとり結ぶさまざまな関係のことをさします。文化は秩序を作りだします。…逆に社会は多くのエントロピーを生みだし、エネルギーを浪費し、社会的葛藤や政争、個人のうちに生じる心理的緊張によって消耗してゆきます」¹⁹⁾とも述べている。

レヴィ=ストロースが現代の文明社会について指摘した事柄は、きわめて重要である。彼の言うエントロピーとは、無秩序を生み出す力である。彼は、われわれの社会は、大量のエントロピーを生みだしながら、そもそもの骨格を失って断片化し、社会の成員としての個人は、交換可能な無名の原子の状態へとおとしめられていくと考えていた²⁰⁾。本稿では、『ポポル・ヴフ』は、神話や伝承を記述しているが、それは荒唐無稽なものではなく、個々人あるいは集団の地位や役割が所与の社会においてどのように認められなければならないか、という指標を語るものとして考えられることを示してきた。現代において、社会そのものが断片化し、社会を作り上げていく人びとを「交換可能な」無名の原子であると認めるなら、個々人や集団のもつ地位や役割は、どのように考えられ、あるいは考えられるべきであろうか。現代社会の様相について考察することは本稿の目的ではないが、『ポポル・ヴフ』が語られていた、現代とは異なった時空間に生きた人びとが作り上げていた社会の様子を見ようとするとは、単にその時代を知るということだけではなく、われわれの生きる現代社会と比較することで、われわれ自身の生きかたへ眼を向け、自省することに繋がると考えなくてはならない。

注

1) 木村 (1989), 横山 (2005)。

2) 横山 (1993), 横山 (2014)。

- 3) 横山 (2000).
- 4) Weaver (1993), p. 145; Saravia E. (1995), pp. xi-xv.
- 5) 『ポポル・ヴフ』の内容については, Ximénez (1973) および, レシーノス (2001) を参照した.
- 6) Ximénez (1973), p. 45; レシーノス (2001), 23 頁.
- 7) ミード (1973), 148-149 頁 ([] は訳者).
- 8) ミード (1973), 152 頁 ([] は訳者).
- 9) ミード (1973), 175 頁 ([] は訳者).
- 10) リントン (1952), 76 頁.
- 11) Linton (1947), p. 50.
- 12) Linton (1936), pp. 113-131.
- 13) バーガー (1979), 168 頁.
- 14) ミード (1973), 234 頁 ([] は訳者).
- 15) Ximénez (1973), p. 45; レシーノス (2001), 27 頁.
- 16) Ximénez (1973), p. 49, p. 55; レシーノス (2001), 26, 31 頁.
- 17) Ximénez (1973), p. 69; レシーノス (2001), 40 頁.
- 18) レヴィ＝ストロース (1988), 75-76 頁.
- 19) レヴィ＝ストロース (1988), 77-78 頁.
- 20) レヴィ＝ストロース (1988), 78 頁.

参考文献

- P.L.&B. バーガー (1979) 『バーガー社会学』(安江孝司他訳) 学習研究社.
- 木村玲子 (1989) 「ワイェブ一年の更新儀礼にみるマヤ人の時間認識」東海大学大学院文学研究科修士号請求論文.
- クロード・レヴィ＝ストロース (1988) 『現代世界と人類学 第三のユマニズムを求めて』(川田順三他訳), サイマル出版会.
- Ralph Linton (1936), *The Study of Man: An Introduction*. Appleton-Century-Crofts, INC.
- Ralph Linton (1947), *The Cultural Background of Personality*. Routledge & Kegan Paul Ltd.
- ラルフ・リントン (1952) 『現代社会科学叢書 文化人類学入門』(清水幾太郎他訳) 東京創元社.
- G.H. ミード (1973) 『精神・自我・社会』(稲葉三千男他訳) 現代社会学体系第 10 巻, 青木書店.
- A. レシーノス原訳 (2001) 『マヤ神話 ポポル・ヴフ』(林屋永吉訳), 中央公論新社.
- Albertina Saravia E. (1995), *Popol Wuj: Antiguas Historias de los Indios Quiches de Guatemala*, Editorial Porrúa, S. A., Mexico.
- Muriel Porter Weaver (1993), *The Aztecs, Maya, and Their Predecessors: Archaeology of Mesoamerica* (3rd edition). Academic Press.
- Francisco Ximénez (1973), *Popol Vuh: Empiezan las Historias del origen de los indios de esta provincia de Guatemala*, traducido de la lengua quiché a la castellana por el R. P. Fray Francisco Ximénez, Edición Facsimilar, Paleografía parcialmente modernizada y notas por Agustín Estrada Monroy, Editorial "Jose de Pineda Ibarra", Guatemala.
- 横山玲子 (1993) 「マヤにおける水界と他界」『文明研究』第 11 号, 東海大学文明学会, 17-35 頁.
- 横山玲子 (2000) 「球戯と王権—マヤの神話『ポポル・ヴフ』に語られた世代交代と権力の象徴」『時間と支配—時間と空間の文明学』(齋藤道子編) 東海大学出版会, 91-124 頁.

横山玲子 (2005) 「マヤにおける 5 の象徴性—王権と中心性をめぐって—」『マヤとインカー王権の成立と展開』(貞末堯司編) 同成社, 127-138 頁.

横山玲子 (2014) 「マヤ文明の研究を通して考える比較文明学の方法—一切断の方法論から接合の方法論へ」『文明の未来』(比較文明学会 30 周年記念出版編集委員会編) 東海大学出版部, 163-181 頁.